

特集「社会性と感情」

エモーション・スタディーズ第2巻編集部会

感情は、私たち人（ヒト）の環境適応にきわめて重要である。自然環境ならば、たとえば人（ヒト）はヘビを見た際に恐れを感じることで、回避行動を動機づけられ安全の可能性が高まる。また、他者が存在し対人関係が生じる社会的環境ならば、自身が何か過ちを犯した際には、罪悪感が生じて対人関係を修復するための謝罪という行動を促す。このように感情には、人（ヒト）の生存や集団内での適応に必要なシグナルを伝える役割がある。

また、罪悪感や恥は、恐れや怒りのような基礎的感情に比べて、対人的影響が大きい感情であることから社会的感情とも呼ばれる。人（ヒト）が社会的動物であるならば、自然環境で生き残るために多くの動物が有している感情に加え、恥や罪悪感のように、さまざまな他者と関わり、集団での生活に適応するための感情が必要となる。

人（ヒト）は、生後約18ヵ月頃から鏡に映った客体的な自己像が知覚でき、困惑、共感、羨望を示すようになる。さらに、基準・規則・目標などに関わる認知能力の高まりにより、恥、罪悪感、嫉妬、妬み、誇り、驕りといった自己意識的で評価的感情（self-conscious emotions）が発達する（永房，2009）。また、記憶や認知的能力の高まりとともに社会的環境でさまざまな経験をすることで、「時間的に拡張された自己」といった自己知識をもつこともできるようになる。つまり、人（ヒト）の感情を理解するには、自己の客体的知覚、社会的ルールの認知、自己理解と評価に関する知見が必要であり、さらにいえば時間経過に伴う「発達」の視点からの研究が重要である。

ところで、発達研究では、その個人の発達を調べる個体発生的発達だけでなく、系統発生的発達、すなわち生物学的進化の視点も必要である。集団で生活し、遺伝子的にも人（ヒト）に近いチンパンジーなど他の霊長類を対象とした研究を行い、共通性や相違点を探求することで、広義の意味での“社会性”が求められる動物の感情に関する知見を得ることができる。さらに、その“社会性”に関わる感情の背景となる生物学的、生理学的過程を明らかにするためには、特定の遺伝子や神経伝達物質の働き、fMRIやPETを用いたイメージング研究など脳内メカニズムを可視的に調べる研究が有用である。そのためには神経科学、医学、生

理学といった学際的アプローチも求められよう。

本特集は、このような観点に基づき、「社会性と感情」をテーマに開催された日本感情心理学会第23回大会（永房典之委員長，新渡戸文化短期大学）実施委員会によって企画された2つのシンポジウム、「感情と社会性の発達」と「感情の脳科学」をもとに企画された（http://jsre.wdc-jp.com/annual_convention.htm）。

本特集は7篇の論文からなるが、そのうちの4篇は「感情と社会性の発達」を取り上げたものである。板倉（2016）は、アニメーション刺激を用いた一連の研究から、10ヵ月齢の乳児においても弱者に対する同情の萌芽とみられる行動が観察されたことを報告し、発達のごく初期から向社会的行動を知覚し、社会道徳的判断に結びつく評価が行われている可能性を示唆している。また、久保（2016）は、幼児が感情経験について語ること、すなわち感情語りに焦点を当て、家庭内での家族との会話の観察や、幼稚園の生活に密着した参与観察のようなフィールド的研究により、感情語りが幼児期において顕著に発達することを示している。そのうえで、感情と語りについての子ども自身の知識と理解とともに、大人による導きの重要性を指摘し、豊かな感情語りが自己理解の発達を促すことを示唆している。

さらに、渡辺（2016）では、特に小学校という学校現場における感情リテラシー教育に焦点を当て、学校危機予防という視点から行われている感情に関する教育実践の具体的取り組みが紹介されている。同時に、このような実践的取り組みをさらに有益なものとするために、感情に関する基礎的発達研究の必要性とともに、感情発達のアセスメントや、よりクオリティの高い実践方法開発の必要性、すなわち、ミクロからマクロ、マクロからミクロの双方向の視点をもつ成果の蓄積の必要性を指摘している。一方、遠藤（2016）は、社会性と感情との関わりを、個体発生と系統発生の両面から取り上げ、「利己と利他の間を精妙に調整し取り持つものとしての感情の性質の一端を審らかに（p. 25）」しようと試みている。感情が、狩猟採集を生業とする小集団生活を舞台に進化したことを前提に、現代の巨大化した社会における感情の役割を検討することの重要性を指摘している。

「感情の脳科学」をテーマにした論文は3篇である。

石田 (2016) は、相手の動作意図や感情を理解する社会的認知機能の基盤の一つと考えられているミラーニューロンシステムに関係する神経ネットワークを解明する研究を紹介している。マカクザルを対象にした一連の研究を踏まえ、腹側運動前野-SII- 島皮質- 下頭頂小葉が形成する神経ネットワークが、自己の身体表象に基づき、他者の動作意図、感覚、感情を推測する脳メカニズムに関与することを示唆している。また、日道 (2016) は、近年注目されている一塩基多型解析による共感の遺伝的基盤の解明と、共感の潜在的処理メカニズムを解明するための機能的磁気共鳴画像法のような脳機能イメージング法とを組み合わせた研究を紹介している。日道論文では、4つの構成要素(先行条件、過程、個人内的な結果、対人的な結果)を仮定する組織的モデルに基づいて、共感のメカニズムを遺伝、神経、心理的側面から多層的に理解し、さまざまな構成要素をもつ包括的な事象としてとらえることの重要性と、学際的研究の推進を唱えている。

さらに、大平 (2016) は、本誌創刊号において共感について論じた特集論文(大平, 2015)の続編として、ヒトの社会性を実現する意思決定に関わるシステムと、その基盤となる神経メカニズムについて論じている。大平論文は、近年の研究によって解明されつつある社会的感情や社会性と特定の脳部位との関係を示すとともに、それが単なる脳マッピングに留まるのではなく、どのような原理で形成され、作動しているかを解明する必要があることを指摘し、その具体的な仕組みとして、強化学習に基づく意思決定を提案し、一連の研究を紹介している。

これらの2つのテーマに関する7篇の論文は、分野領域とともに、それぞれ異なる方法論に基づくものであるが、いずれも、人(ヒト)の社会性の基盤にある感情や、感情に関係した同情、共感、向社会性の問題に取り組んでいる研究であり、特集全体として相互に関連づけて読むことで感情の多面的性質をより深く理解できる。

ところで、社会性を、他者との良好な関係、もしくは、他者との敵対的ではない関係に関する問題と捉え

ると、本特集のテーマ「社会性と感情」は、本誌創刊号の特集テーマ「社会的共生と感情」と密接に関係していることがわかる。創刊号では、社会心理学と教育心理学を中心に、文学や国際関係論の視点も交えた議論を特集したが、本特集では、創刊号のテーマを引き継ぎつつ、そこでは限定的にしか取り上げることでできなかった、発達や、脳神経科学分野の研究を紹介することができた。本誌「エモーション・スタディーズ」が、感情に関わる学際的研究、最先端の研究を紹介することを目的に創刊されたことを考えると、この特集は、独立した特集としても、また創刊号特集との一連の特集としても、その役割を果たすものと思う。是非、創刊号特集と合わせてお読みいただきたい。

引用文献

- 遠藤利彦 (2016). 利己と利他のあわい——社会性を支える感情の仕組み—— エモーション・スタディーズ, 2, 25-30.
- 日道俊之 (2016). 共感の多層的なメカニズムの検討——イメージング・ジェネティクス研究から—— エモーション・スタディーズ, 2, 38-45.
- 石田裕昭 (2016). 他者の感覚・情動を推測する脳メカニズム エモーション・スタディーズ, 2, 31-37.
- 板倉昭二 (2016). 乳児における向社会的行動の知覚——乳児にとってのナイス・エージェントとは?—— エモーション・スタディーズ, 2, 3-9.
- 久保ゆかり (2016). 幼児の感情語りの世界——何に支えられて何を支えるのか—— エモーション・スタディーズ, 2, 10-15.
- 永房典之 (2009). 自己意識的感情の理論 有光興記・菊池章夫(編著) 自己意識的感情の心理学 北大路書房. pp. 37-53.
- 大平英樹 (2015). 共感を創発する原理 エモーション・スタディーズ, 1, 56-62.
- 大平英樹 (2016). 価値・予測・誤差——社会性を支える意思決定システム—— エモーション・スタディーズ, 2, 46-55.
- 渡辺弥生 (2016). 児童の感情リテラシーは教育しうるか——発達のアウトラインと支援の在り方—— エモーション・スタディーズ, 2, 16-24.